

はじめに

西田幾多郎の「春琴抄」評価

戦後間もなくして、桑原武夫は「日本現代小説の弱点」（一九四六年）という文章を書いた。西洋の近代小説の根本的特色は倫理性にあるが、日本の近代小説はそれを欠いていると主張する桑原は、こんなエピソードを記すところからは始めている。

西田幾多郎がまだ京都にいたときに、桑原がある日訪ねてみると、机上にD・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』のフランス語版がおいてあり、この小説を褒めていた。それで日本の小説についての感想をうかがうと、「鷗外、漱石以後のものは殆んど読んでゐないが、谷崎の『春琴抄』といふのは皆が余りやかましくいふから読んでみた、といはれるので、どうですかと問ふと、『何しろ人生いかに生くべきかに触れてゐないからね』とのみ答へられた」という。

大学生の頃、この文章をはじめて読んだとき、アレツとある種の違和感をもった。たしかに

ロレンスの作品は重厚長大で、生きることの意味について深く考えさせられる。

『チャタレイ夫人の恋人』は、准男爵のクリフォード・チャタレイと結婚したコニーを主人公とするが、新婚間もなく夫が第一次大戦に出征し、半身不随となつて帰つて来る。夫との性的な結びつきをなくしたチャタレイ夫人は、森番のメラーズとの出会いによつて、性のよろこびを知ることゝ原初的な生を回復する。こうした物語をとおして、私たちは人生とは何かということを考えざるを得ない。

一方、谷崎潤一郎の『春琴抄』（一九三三年）は、大阪道修町の薬種商の娘春琴に仕えた佐助という丁稚てつちの物語である。春琴は九歳の折に失明したが、まねな美貌の持ち主で、きわめて気位が高く、氣むずかしかつた。音曲ねきょくの天分にすぐれ、検校けんぎょうのもとへ稽古に通つたが、その手曳てびきををし、献身的に奉公したのが佐助である。

春琴はやがて懐妊し、生まれてきた赤児も佐助そっくりだったが、相手が佐助であることを否認しとおした。ふたりは一戸を構えて弟子をとるようになったが、内実は夫でも佐助は弟子、奉公人として春琴に仕え、表向きは厳格な主従関係を守つた。春琴の稽古は厳酷をきわめ、その美貌を目当てに道楽半分で通うものの中なかには、厳しすぎる指導と驕慢きょうまんさに反感をいだくものもあつた。ある夜、春琴は何者かに熱湯を浴びせられ、顔にひどい火傷やけどを負う。佐助は、醜みにくくなつた春琴を見ないようにみずから針で目を突き、昔のままの春琴を内心にとどめて、死

ぬまで変わらない献身をつづけた。

『春琴抄』は、ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』のように客観的な描写と会話でグイグイとおしてゆくりアリズムの手法とは違った形式によつて書かれている。架空の語り手「私」が登場し、偶然に入手した「鴎屋春琴伝」というこれまた架空の小冊子に拠りながら、「伝」の内容を紹介する。語り手は春琴と佐助の墓所を訪ねたり、晩年のふたりに仕えたという老女を訊ねたりして、「鴎屋春琴伝」の叙述に適宜考証を加えるかたちで物語を展開している。

したがって、両者には一見して大きな相違がある。あたかも巨大なキャンバスに絵の具を盛りあげるように描かれた油絵と、繊細でありながら力強いタッチで丹念に書きこまれた小ぶりの日本画ほどの違いである。が、男女がそれぞれ自己の理想とする異性を希求して、最大限の努力を払う姿を写し出していることには変わりなく、愛と性の交響する世界を描き出していることに性愛の重要性を強調する両者の姿勢は共通しており、私にはさほど大きな違いがあるとも思えなかった。

自分の愛する女性のために自己の人生のすべてをささげ、一切の功利的な欲念を放棄して徹底的に愛し抜くこと。まさに佐助が春琴にささげた献身とはこうしたものであった。このような人間の生き方を描いた小説が、どうして「何しろ人生いかに生きべきかに触れてゐないからね」と評されなければならなかったのか。「人生いかに生きべきか」というとき、そこに想定

された人生とはどのようなものだったのであろうか。

伊藤整^{せい}の谷崎文学再評価

戦前から、戦後も一九六〇年頃まで谷崎潤一郎は、無思想の作家と称された。近代社会において生きるといふことは、自分自身で自覚的に判断し、意見を述べ、批評したりして自分たちの生きる社会をつくりあげるといふ意識をもつことである。ことに一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけては、階級闘争を標榜^{ひょうぼう}したプロレタリア文学が隆盛をきわめ、三〇年代後半からは戦時体制のもとに民族主義的な思潮が台頭した。

そうしたなかで魅惑的な女性の美しさのためにのみ命をささげるといふ谷崎の姿勢が、多くの論者から「思想がない」と評されたわけである。こうした谷崎評価を大きく転換させたのは伊藤整である。まずはじめに伊藤は「谷崎潤一郎の芸術の問題」（一九五〇年）で、『春琴抄』は「男性が女性のためにのみ生きる」という「潤一郎の思想の極点をなしている」とし、これは「社会組織の変革などよりもっと根本の永遠の人間のテーマ」なのだと評した。

次いで伊藤は『現代文豪名作全集 谷崎潤一郎集』（一九五二年）「解説」において、「谷崎潤一郎を『思想のない作家』と決定することには私は反対である」と、みずからの見解をいっそう鮮明に提示した。「世人は、民族主義を抱くとか、共産主義思想を持つとかいうことのみを

『思想』と考えているのではないだろうか。物質条件が人間を左右すると考えたマルクスも思想家であるが、性慾せいよくが人間を左右すると考えたフロイドや、優越感が人間を左右すると考えたユンクも思想家である」といい、「肉体の条件において倫理的であることは、如何いかにすれば可能であるか、また如何に不可能であるか。これが谷崎潤一郎という作家の本来の思想の問題であつた」と論じた。

また一九五〇年に伊藤整はロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』の完訳を小山書店から刊行したところ、その過激な性描写によつて猥褻わいせつ文書頒布の疑いで起訴されるということがあつた。伊藤は裁判をとおして争つたが、旧秩序の古い道徳観をくつがえすことができずに有罪判決をうけた。性にまつわる言説が、根強くはびこる旧来の価値の体系に大きな衝撃を与えうるもので、戦時中の反戦思想にも似たような体制側からの強硬な弾圧をうけるものだということを思い知らされた事件でもあつた。

伊藤整は一度だけ谷崎から褒められたことがあるといっている。それは『春琴抄』の評価に關して、佐助が目をつぶす行為には昭和初年代の混乱した日本の現実に目を閉じ、関西に残る日本の古典的伝統美のなかに閉じ籠もろうとした作者の気持ちが象徴されているのではないかという伊藤の読みを、谷崎がことのほか喜んだというのである（『座談会大正文学史』）。

時代と思想

第二次大戦中に谷崎は『細雪』^{さいせつ}の執筆を開始している。冒頭部分を「中央公論」誌上に二回だけ掲載したが、それ以後は軍部の圧力によって発表が禁じられた。作品の発表は禁じられたものの、谷崎は疎開先の熱海の別荘に籠もって、その続稿を書き進めた。谷崎は時局にまったく関心がなかったというわけではなく、『細雪』の主人公貞之助^{ていのすけ}のように強い関心をいだきながらも、自己の作品にそれを正面切って表現することはなかった。

やがて戦局がいつそう厳しさを増して、本土空襲がはじまるようになってからは、わずかな縁故をたよって岡山県の山深い勝山という地に再疎開した。あたかも穴倉に身をひそめて弾丸が頭上を通り過ぎるのを待つかのように、ひたすら時局から逃れ、身を隠すようにしながらも『細雪』の原稿だけは書きつづけていった。

「人生いかに生くべきかに触れてゐない」と『春琴抄』を評した西田幾多郎は、戦時体制へ向かおうとする時代をどのように過ごしたのだろうか。当時すでに日本で独創的な哲学を構築した思想家として絶大な権威をもった西田は、体制側にもいろいろなルートでつながりをもっていた。一九三七年六月に第一次近衛文麿^{このえふみまろ}内閣が組閣されると、日本の将来を憂えていた西田は、近衛の京大時代の保証人で、教え子たちも近衛の近くにいた関係から働きかけをしてみたが、

なんの功を奏することもなかったようである。

文部省からは懇願されて「教学刷新評議会」の委員となり、その後には教学局の参与をおしつけられている。文部省によって設置された「日本諸学振興委員会」の第一回哲学公開講演会では、のちに『日本文化の問題』（岩波新書）に収められる講演を行い、時代へのささやかな抵抗を示したが、思想統制を強化する時代の潮流にはまったく歯が立たなかった。

一九四三年五月十九日には、矢次一夫を中心とした民間の国策研究会で東亜共栄圏の歴史的哲学的理念について話をし、後日その内容を「世界新秩序の原理」という文章にまとめた。そこには当時東条英機首相の懐刀であった陸軍軍務局長佐藤賢了なども出席しており、戦後になつてこのことが西田の戦争責任を問う議論へと発展していった。そこには大きな誤解と行き違いがあつたようだが、終戦の二ヶ月前の一九四五年六月七日に、日本の行く末を案じながら西田は七十五年の生涯を閉じている。

日本文学を代表する文豪の谷崎潤一郎と世界的な權威の哲学者であつた西田幾多郎との身の処し方のどちらがいいとか悪いとかは、もちろん一概にいえることではない。作家と哲学者という大きな違いもあるうが、それぞれに精いっぱい自己の生き方を貫いたのだとしかいいようがない。ともに壮絶な人生であり、今日から振り返ってみれば、私たちは身のすくむような思いをいだかざるを得ない。

本書の構成

それにしても、誰しも軍人や官吏、あるいは政治、実業、学問などで身を立てることを願った、明治という立身出世の時代にあつて、谷崎潤一郎はどうして男性が女性の美しさのために奉仕することのみに生き、社会の変革などよりも官能の充足の方がもっと大切だといったような人生観をいだくようになったのだろうか。そうした世界観を谷崎がどのようにして手に入れるようになったのか、ここに検証してみたいと思う。

本書の構成は、大きくふたつに分けている。第一部には東京日本橋の町人の家に生まれた谷崎潤一郎が、どのようにして近代日本を代表する小説家（谷崎潤一郎）となったか、を追つてみた。その契機になった要素として教育と友人が大きかったと思われるが、それはいつの時代にも変わらないことなのかもしれない。

したがつて、第一章では小学校時代の教育をとおして芽生えた〈聖人願望〉ともいふべきものを取りあげた。第二章では中学・高等学校時代の読書体験をとおして、高山樗牛ちよきゆうの美的生活論や友人の杉田直樹から教えられたクラフト・エビンググやオットー・ヴァイニンガーなどの精神病理学がその後の谷崎に及ぼした影響について考えた。

第三章は小説の処女作『刺青』しせいにその後の谷崎文学の諸要素がすべてあらわれているところ

から、『刺青』の基底にあるものを見きわめ、谷崎文学の特色を明らかにした。そこにかがわれる〈痴愚礼讃〉の思想は第四章で取りあげた『痴人の愛』にも通ずる。その過程で谷崎にとって聖と俗、善と悪、賢と痴、精神と肉体といった二項対立が克服すべき問題として浮上するが、その問題を『二人の稚児』をとおして検証した。また悪人正機説で知られる親鸞の『歎異抄』を心の支えに生き、谷崎と同じように旺盛な性欲と自我との格闘に苦しんだ宗教者あけ鳥敏とも比較対照してみた。

第二部は関東大震災によって関西へ移住した谷崎が、前期の作品に露呈していた偽悪的なテーマから、みずからの情欲を古典主義的な作風に沈潜させて、文豪谷崎潤一郎と評されるまでに至った軌跡を追った。

第五章では一九二五年に刊行されたヴァイニングの『性と性格』全訳との出会いが、後期の出発に大きな影響を及ぼしたと推定し、それとの関連を『青塚氏の話』あおつか『丑』まんじ『蓼喰ふ虫』たぐくをとおして論じた。第六章では谷崎の恋愛論である「恋愛及び色情」を取りあげ、『盲目物語』などとの関連を確認した。「恋愛及び色情」には、発表の前年に書かれたが、その後には廃棄された草稿が残っている。その草稿についても検討し、巻末に資料として全文を翻刻紹介した。

第七章では昭和期の谷崎文学のひとつの頂点をなした『春琴抄』に至るまでの歩みを確認しながら、その背景にあった谷崎自身の恋愛体験にも言及した。第八章は松子との結婚生活から

生まれた『源氏物語』現代語訳の仕事や、『細雪』『少将滋幹しげもとの母』など戦中から戦後へかけての谷崎文学を論じた。

最後に「おわりに」で、晩年の谷崎が『鍵』『瘋癲老人日記ふうてん』において到達した地点を確認し、谷崎が生涯にわたって文学に希求したものが何であったかを考察した。そして、その死によつて書かれることはなかったが、最後に構想された「御菩薩魍魅子」の登場する作品についても触れてみた。そこからは、谷崎の最後に求めた願望のかたちを見ることもできるようである。